

# YOUCHI SOGA

能 meets 五周年記念

## JUBAN GIRI

第四回 能 meets 能

### 「夜討曾我 十番斬」 あらすじ

#### ① 曾我兄弟が、團三郎・鬼王を引き連れて、富士の裾野に向かう

兄の曾我十郎祐成、そして弟の曾我五郎時致の二人は弓矢を持ち舞台上に登場。

その後には團三郎・鬼王（この二人も兄弟）が後にしたがつている。頼朝が催す「鹿狩り」に加わる為、富士の裾野に向かっていると語る。

⇒「我が足柄や遠かりし富士の裾野に着きにけり」と謡います。「我が足ながら」遠く感じるという意味で、やはり仇討ちという重大さ、そして慕う母とも別れてきたという重みもあったり、または心急ぐ故に、いつもより遠く感じるという解釈もあるかと思えます。足柄は地名で足柄山（相模と駿河の国境）の事です。やがて四人は富士山の裾野に到着します。舞台の背景を動かして、移動を表現するのではなく、「謡」というセリフでそれを表現します。

#### ② 第五郎は兄十郎に仇討の話を持ち掛ける

適当な場所に幕を張り陣を作った兄弟は、陣中にて談合し、親の仇である祐経を今夜夜討にすると決める。その前に、形見の品々を團三郎・鬼王に持たせ、曾我兄弟の母のいる故郷へ帰そうと計画する。

⇒「しかるべき所に幕を御打たせ候へ」といいながら、実際に作業をしているところは見せず、兄十郎が座ったことで、幕の中に兄弟が落ち着いた事を表します。その瞬間に舞台の中は「幕の中」にその場所がうつっており、全く無駄のない能の演出方法です。後見座にて正面向いて座っている團三郎・鬼王は、幕の外で、いついかなる命令が下ってもすぐに馳せ参じる事ができるよう、控えています。この團三郎と鬼王の佇まいが大事で、密かに仇討ちを狙っている四人の緊張感が幕の中にも、そして外にも漲っていないといけません。

#### ③ 曾我兄弟は團三郎兄弟に、故郷へ帰るよう命令する

幕の中に團三郎・鬼王兄弟を呼び、兄十郎が、今夜夜討をするということ、そして二人は形見を持って故郷へ帰るよう命じるが、團三郎と鬼王は反発。第五郎が力づくで首を縦に振らせるが、團三郎兄弟は、仇討ちに加わる事ができないならと、二人で刺し違えようとする。「君臣の礼」を引き合いに兄十郎はようやく二人を説得する。

⇒兄十郎は團三郎に、「汝兄弟に申すべき事を承引すべきか」と、子細を言う前に先に首を縦に振らせます。きっと團三郎達は故郷へ帰る事を嫌がるだろうと、兄十郎は気付いていたのでしょう。そしてもしや、曾我兄弟は元々この仇討ちに、團三郎兄弟を巻き込ませたくなかったのでは…。能では正解を書かず、敢えて人情

話にしていません。帰れば本意ではない、でも帰らねば命令に背く…。團三郎と鬼王が悩んだ末に選ぶのは「死」。そこに兄十郎は「君臣の礼」を用いて命令に背けば絶縁せざるを得ないと論じます。家来への思い、武士としての本分。そのようなものが垣間見える名シーンです。

#### ④ 曾我兄弟は形見を渡し、團三郎と鬼王に別れを告げる

中国の故事を引き合いに出して形見の大切さを語り、やがて兄は文を、弟は御守を團三郎・鬼王に手渡す。涙ながら去っていく團三郎と鬼王。それを見送り、姿が見えなくなってから曾我兄弟もやはり堪えられず落涙する。

⇒「老少不定と聞く時は若き命も頼まれず」老いた方が先に命を終えるとは限らない。若き息子の方が先に旅立つ事になるが、それも世の習いであり仕方がない事とあきらめてくださいと、兄十郎からの母への思い。一方第五郎は、形見があると余計に辛いかもしれないが、せめてもの慰めになるならば、この守りを五郎だと思わずずっと連れ添わせてほしいと願い、「この世の縁なくと来世をば濟げ給へや」と守りに祈りを込めます。「さらばよ急げ急げ使ひ 涙を文に巻き籠めてそのまま遣る 文の干ぬ間にと」自分達の涙をも一緒に運んでくれと、悲痛な兄弟の様子が窺えます。團三郎兄弟を見送った曾我兄弟は、哀れな面持ちのまま退場するのではなく、勿論祐経への仇討ちへと気持ちが動いていきます。涙に明け暮れたという事ではなく、その涙を振り切って次に向かっていく兄弟を、「早鼓（はやつづみ）」という小鼓・大鼓の演奏がその緊張感を助け、二人は退場します。

#### ⑤ 大藤内（おとうない）が宿所から命からがら逃げてきた様子を語る

大藤内とは、祐経に気に入られいつも側にいた人物。その彼が見るも無残な恰好で逃げてくる。そして祐経が自分の目の前で曾我兄弟に討たれた事を、狩場の者に話して聞かせる。

⇒この間狂言のシーンで、なんとこの曲の主軸である祐経への仇討ちは無事に果たされたことが物語られるのです。能によくあることですが、一番肝心のシーンまでも略してしまう、大胆な演出です。もう一人の主役、祐経は舞台上には登場しません。だからこそ、彼はどんな人物なのか、ずる賢い顔してるのか、いや実は穏やかな人物なのか…出さないからこそ皆さん色々な想像が出来るのではないのでしょうか。

個人的には、曾我兄弟が退場した時の「早鼓」の演奏がそのまま、大藤内の登場になる演出が大変巧妙だと常々感じています。

#### ⑥ 祐経を討ち取った曾我兄弟に大勢の敵が押し寄せる

祐経を討ち取った後、祐経が殺されて騒然とする敵を相手にたった二人で戦う。見事に敵を蹴散らせるが、最後の敵、新開を討ち漏らしたと第五郎は新開の後を追ひ、ここで兄弟が離れ離れになる。そこに仁田忠常という強者が現れ兄十郎と一戦交え、十郎の刀を打ち落とす。十郎を殺さずに帰ろうとする仁田に、十郎は自分の首を刎ねろと言ひ、仁田は涙ながらその首を持って帰る。

⇒このシーンが、今回の特殊演出「十番斬」の所以です。「斬組（きりくみ）」と呼ばれる、能では珍しいチャンバラのシーンがあり、迫力満点です。といひましても、時代劇や現代演劇の殺陣でみるようなリアルなものではなく、あくまで形式的な動き。いかに刀を素早く振り回すかが見どころではなく、刀を合わせ敵と対峙する一人ひとりの「気」を主体にして演じるのです。いわば体の外側でなく、内側をメインにして動くという事で、これも能の神髄の一つだと思ひます。

#### ⑦ 残された第五郎が古屋五郎・御所五郎丸と奮戦するが捕らえられる

大変強い古屋五郎、そして御所五郎丸の前に、兄を探しながら現れた五郎。兄の戦死を悟った五郎は、これぞ最後の闘いぞと古屋五郎に挑み、鎧を削っての奮戦の末古屋を倒す。刀ではかなわないと御所五郎丸は、薄衣で姿を隠し、女のふりをする。油断した五郎は五郎丸と掴み合いになるが、最後は組み伏せられ頼朝の前に引き出されるのであった。

⇒「死なば屍を一緒とこそ思ひしに」と最後まで兄を慕う五郎。兄の死を悟って弟も自分の死に場所を探そうとしたのか…。いや兄の分までまだまだ自分は戦うのだと決意を強くしたのか…刀を捨てる時の五郎の気持ち、引き立てられる時の五郎の気持ち。やはり能は心を主体にした演劇であると私は強く感じます。

当時、女性が夜に外を歩く時は衣を被り、顔を隠して外出したのだそうです。ひとかどの人物ならば女性には絶対に手出ししない事を知っていたからこそ、敢えて女のふりをした御所五郎丸。大藤内も同じく女性の恰好で逃げていく。その一方で女性には絶対に手出しをしないという武士道を貫き、それが為には捕らえられた曾我五郎。いろんな人物像が見える一曲です。

文：林本 大

# YOUCHI SOGA

終了予定十七時過頃

古屋五郎 御所五郎丸	山中 上野	雅志 雄介	平子 愛甲	寺澤 梅若	拓海 秀成	小袖曾我 五郎時致	舞囃子 舞囃子	番組 番組
繩取 繩取	武田 樹下	崇史 千慧	堀野 原部	上野 梅若	朝彦 幹汰	大鼓 小鼓	大倉慶乃助 成田達志	笛 斎藤敦
夜討曾我 十番斬	仁田忠常 福王	知登	福王 知登	梅若 朝彦	拓海 秀成	大鼓 小鼓	大倉慶乃助 成田達志	笛 斎藤敦
問 後見	大藤内 狩場ノ者	山本 山本	新開 吉香	白杵 河村	宇田 山田	堀野 梅若	大鼓 小鼓	大倉慶乃助 成田達志
山階彌右衛門 赤松禎友	武富康之 山本則秀	山本則重	吉香 河村	白杵 河村	宇田 山田	堀野 梅若	大鼓 小鼓	大倉慶乃助 成田達志
地謡	宮本茂樹	大水楓	藤田雄一	水田雄一	武田雄一	山本雄一	宮本雄一	山本雄一
地謡	茂樹	裕雄	丈雄	乃助	志助	志助	志助	志助
地謡	深野	味方	坂口	武田	武田	武田	武田	武田
地謡	貴彦	貴彦	文信	志	志	志	志	志

### ごあいさつ

本日は「第四回 能 meets 能」にご来場賜り心より御礼申し上げます。

五年前「演劇関係の方々への能講座を開いてほしい」というご依頼から始動しましたが「能meets」です。大阪は勿論東京・宇都宮、徳島、高知、博多、長崎にて現地のスタッフに支えられながら、のべ4000人弱の皆様の前で能の話をさせていただく機会を得ることができました。講座にお越しのほとんどの方が能をご存じではないケースが多いのですが、私がその入口をつとめているという責任を持って、毎回しっかりと企画をし活動して参りました。

そしてそのお客様方から「はやく能が観たくなった」というお声が多く、「能を知らない方が、講座だけではなく能公演をご覧になるまでをお世話したい」とスタッフと話し合い、公演「能meets 能」が開催に至りました。今回で四回目になります。

今回は大阪だけでなく、東京や京都からも多くのご出演先生方にお力添えをいただき、精一杯舞台をつとめさせていただきました。これまでこのような活動を続けることができましたのも、偏にいつもご来場いただきます皆様方のご理解ご声援の賜物と深く感謝申し上げます。

私事ではございますが、この度文化審議会より国への答申が行われ、重要無形文化財保持者（総合指定）の認定を頂戴する運びとなりました。これを機に尚一層芸道に精進し、日本文化の発展につとめる所存です。

これからも引き続き温かく見守っていただきますようお願い申し上げます。

本日のご来場誠にありがとうございます。



林本 大